

南アルプスの自然

世界自然遺産登録を目指して

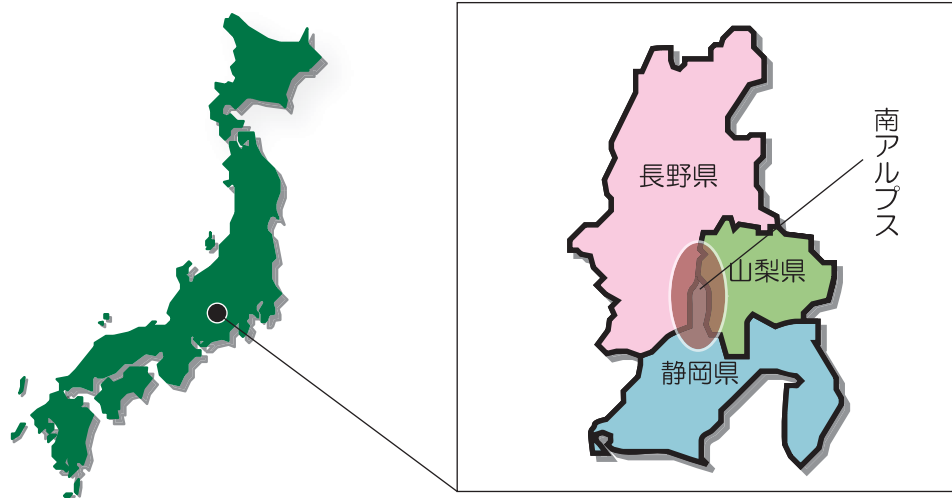


静岡市は、南アルプスの世界自然遺産登録に向けて、学識経験者の協力を得て、南アルプスの動植物について魅力的な自然と学術的な価値をまとめました。
この貴重な自然遺産を守り、次世代に残していきましょう。



南アルプスの概要

本州中央部に位置する南端の山岳地帯



南アルプスは、日本列島の中央に位置し、静岡県、山梨県、長野県の3県にまたがる我が国を代表する山岳地帯です。

本州中央部には、日本アルプスと総称される大山脈があり、北から北アルプス（飛騨山脈）、中央アルプス（木曽山脈）、南アルプス（赤石山脈）と呼ばれる地域に大別されます。

このうち、南アルプスは、甲斐駒・鳳凰山系、白根山系、赤石山系の3つの山系からなり、重量感あふれる山岳風景を形成しています。

3,000m 級の峰が連なる山脈



大聖寺平から見た荒川前岳



お花畑

南アルプスは、本邦第2の高峰北岳を始め、仙丈ヶ岳、間ノ岳、塩見岳、荒川岳、赤石岳など 3,000m 級の山々を 13 座有しています。

北アルプスや中央アルプスは、尖峰をもつ古い山々であり、広大なお花畑が形成されています。一方、南アルプスは、稜線に準平原と呼ばれる平坦な地形が広がり、数多くの特産種を含むお花畑、森林限界が高く鬱蒼とした森林植生が特徴といえます。



南アルプスの動植物

山地（標高 800m 以上）に生育・生息する動植物

南アルプスに生育・生息する動植物種

調査項目	確認種数	絶滅のおそれのある種				特徴的な種			
		法令 条例	IUCN RL	環境省 RDB・RL	県(3県) RDB	日本 固有種	南アルプス 限定種	分布 限定種	南限種
維管束植物	138 科 1,635 種	33 種	30 種	148 種	412 種	535 種	25 種	148 種	180 種
蘚苔類	51 科 248 種	—	1 種	22 種	21 種	—	—	—	—
地衣類	15 科 98 種	—	—	3 種	12 種	—	—	—	—
ほ乳類	15 科 39 種	3 種	33 種	9 種	21 種	26 種	—	2 種	2 種
鳥類	35 科 102 種	4 種	83 種	13 種	36 種	5 種	—	1 種	1 種
は虫類	4 科 9 種	—	—	—	4 種	6 種	—	—	—
両生類	4 科 9 種	1 種	8 種	2 種	7 種	9 種	—	1 種	—
魚類	3 科 7 種	—	1 種	2 種	3 種	3 種	—	—	—
貝類	16 科 45 種	—	—	16 種	7 種	43 種	—	10 種	—
昆虫類	179 科 2,871 種	4 種	—	19 種	130 種	987 種	36 種	210 種	56 種
計	460 科 5,063 種	45 種	155 種	234 種	653 種	1,614 種	61 種	372 種	239 種

「法令・条例」欄の種数は、「文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）」、「山梨県希少野生動植物種の保護に関する条例（平成 19 年条例第 34 号）」及び「長野県希少野生動植物保護条例（平成 15 年条例第 32 号）」に掲載の種を示す。

南アルプスの世界自然遺産登録に向けては、「地球規模での顕著で普遍的な価値」を明らかにする必要があります。

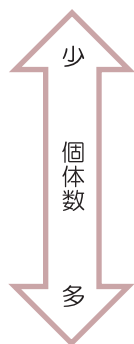
静岡市は、南アルプス全域に生育・生息する動植物種を対象として、平成 19 年度に既存文献の収集・整理により生物リストを作成し、平成 20 年度には、より精度の高いリストとするため、専門家への意見聴取を行い、リストの見直しを行いました。

表は、南アルプスの標高 800m 以上に生育・生息する動植物の種数を示しています。IUCN（国際自然保護連合）等による絶滅のおそれのある種や日本固有種、分布限界種（日本における南限種）も多く、南アルプスにおける生物の多様性を示しています。

南アルプスの動植物の特徴

南アルプスには、植物 1,981 種、動物 3,082 種が確認されています。このうち、絶滅のおそれのある種は植物 483 種、動物 292 種、日本にのみ分布する種は植物 535 種、動物 1,079 種、日本では限られた地域に分布する種は植物 148 種、動物 224 種、日本における分布の南限となっている種は植物 180 種、動物 59 種など、南アルプスは生物の多様性が高い地域といえます。南アルプスには、様々な環境に応じて生きてきた多様な植物を観察することができ、それがさらに多様な動物の生息基盤ともなっているのです。

南アルプスに生育・生息する動植物



○絶滅のおそれのある種…法令や条例で保護されている種、IUCN・環境省・県のレッドデータブック等に掲載されている種。これらの種は、個体数の減少や生育・生息状況の悪化、再生産能力を上回る捕獲・採取にさらされている、あるいは交雑のおそれのある別種が侵入している等により影響を受けている種。

○分布範囲が限定される種…日本固有種（分布域の狭い種）、南アルプス限定種、本州中部限定種等。

○移動や環境が限定される種…移動・分布拡大能力の低い動植物、特定の植物を餌とする昆虫類、厳しい環境に生きる植物等。

○分布域が南限の種…南アルプスが日本における分布の南限となる種。

○広範囲に分布する種…日本固有種（分布域の広い種）、日本以外にも広く分布する種等。

植物相—南アルプスの特徴を示す植物には、「氷河期の遺存植物」と呼ばれるキタダケソウ、チョウノスケソウ、ムカゴトラノオ、タカネマンテマ、ムカゴユキノシタ等があり、これらは北半球の寒冷な地域に近縁種や同種が分布するものの、日本における南アルプス限定種又は分布の南限となっています。これらの種は、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた植物が遺存分布し、一部は種レベルまで分化していった過程を顕著に表していますが、このように温暖な太平洋岸に近い場所にあって、3,000m級の山々を持つ南アルプスには、氷河とともに南下してきた分布の南限となっている種が多くあります。また、南アルプスには、石灰岩地、岩隙地・風衝地、崩壊地、雪田などの特殊環境に生育する植物も多く分布しています。これらの特殊環境に生育する植物は、その環境に適応することで他の植物との競合を避け、南アルプスという地で生き残ってきたのです。

動物相—南アルプスの特徴を示す動物には、「氷河期の遺存動物」と呼ばれるライチョウがあり、北半球の寒冷な地域に同種が分布するものの、日本固有亜種であり、本州中部の高山地帯にのみ生息しています。ライチョウの生息場所としては、南アルプスが日本における南限、世界における南限ともなっています。日本に生息する動物は、高い移動能力をもつ鳥類を除き、日本にのみ生息する固有種が多く、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた動物が遺存分布し、種レベルまで分化していった過程を顕著に表しています。また、南アルプスには、移動能力の低い種や、特定の環境や気候、餌となる植物が限定される種もあり、両生類のアカイシサンショウウオや高山蝶のクモマツマキチョウ、クモマベニヒカゲ、タカネキマダラセセリ等、魚類のヤマトイワナは限られた地域に生息しています。



南アルプスで見られる動植物

植物

維管束植物は、落葉樹林帯～高山帯に生育する 138 科 1,635 種が確認されています。

絶滅のおそれのある種（IUCN・環境省・県のレッドデータブック等掲載種）



ヤツガタクトウヒ ●●●●●



ヤシャイノデ ■●●●●

絶滅のおそれのある種として、維管束植物 441 種が確認されています。これらの種は、生育環境の悪化や採集圧の増加等による個体数の減少がこのまま継続すると、絶滅の可能性が高いと予測されています。

南アルプスで見られる植物のうち、IUCN（レッドリスト）ではヤツガタクトウヒ、ヒメバラモミ、コウヤマキ、オニノヤガラが、環境省（レッドリスト）ではヤシャイノデ、ウロコノキシノブ、キタダケトリカブト、ヒメセンブリ等が「絶滅危惧種」として掲載されています。

分布が限られている種（日本固有種、南アルプス限定種、本州中部限定種等）



キタダケソウ ■●●●●



タカネビランジ ■●●●●

南アルプスに生育する植物には、日本特産の固有種や日本での分布が限られる種が数多く含まれています。これは、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた植物が遺存分布し、一部は種レベルまで分化していった過程を表しています。

特に高山帯には、ヒラギデンダ、タカネマンテマ、キタダケソウ、タカネビランジ等の日本では南アルプスにしか見られない種や、イナデンダ、サンブクリンドウ等の本州中部の亜高山帯～高山帯に分布が限定される種が生育しています。なお、分布が限定される種は、地域個体群の絶滅がその種の絶滅につながるため、その生育地は保全上重要な場所となります。

南限の種



ハイマツ ●●●●●

撮影／増沢武弘



チョウノスケソウ ●●●●●

南アルプスが分布の南限となっている植物には、タカネシダ、キタダケデンダ、ハイマツ、ムカゴユキノシタ、チョウノスケソウ等の多くの高山植物にみられます。

植物の生育は、気候や地形、地質などの影響を受けやすく、特に高標高域に遺存する個体群などは、地史の主要な段階を表す顕著な見本となっています。

南限の植物は、地球規模の環境変動による直接的・間接的な影響への感受性が高く、その存続が危ぶまれています。

厳しい環境に生きる種（石灰岩地、崩壊地、岩隙地等）



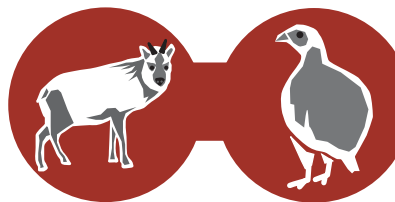
イチョウシダ ●●●●●



チシマギキョウ ●●●●●

南アルプスには、石灰岩地、岩隙地・風衝地、崩壊地、雪田などの特殊環境に生育する植物が数多く分布しています。これらの特殊環境に生育する植物は、その環境に適応することで他の植物との競合を避け、生き残ってきた植物ともいえます。

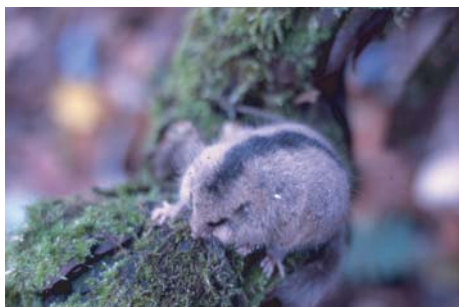
南アルプスの石灰岩地（主に長野県側）には、イチョウシダ、トダイアカバナ、シライコメグサ等が分布しています。一方、高山帯の岩隙地にはセンジョウデンダ、チシマギキョウ等、崩壊性砂礫地にはイワツメクサ、アカイシリンドウ等、雪田・雪崩斜面にはシナノキンバイ、キタダケカニツリ等、風衝地にはガンコウラン、オヤマノエンドウ等が分布しています。



ほ乳類、鳥類

ほ乳類は、落葉樹林帯～高山帯に生息する 15 科 39 種、鳥類は、主に樹林帯に生息する 35 科 102 種が確認されています。

絶滅のおそれのある種（IUCN・環境省・県のレッドデータブック等掲載種）



ヤマネ ■●●●●★



クマタカ ■●●●●

撮影／小池正明

絶滅のおそれのある種として、ほ乳類 34 種、鳥類 91 種が確認されています。これらの種は、生息環境の悪化や個体数の減少がそのまま継続すると、絶滅の可能性が高いと予測されています。

南アルプスで見られるほ乳類、鳥類のうち、IUCN（レッドリスト）ではクロホオヒゲコウモリ、モリアブラコウモリ、ヤマネ、ツキノワグマ等が、環境省（レッドリスト）ではクマタカ、イヌワシ、ライチョウ、ブッポウソウ等が「絶滅危惧種」として掲載されています。

分布が限られている種（日本固有種、南アルプス限定種、本州中部限定種等）



カモシカ ■●●●●★



アズミトガリネズミ ●●●●●◆

撮影／三宅隆

日本に生息するカモシカ、ヒミズ等のほ乳類のほとんどが日本特産の固有種であり、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた動物が、日本列島として分離された中で、種レベルまで分化していった過程を表しています。

南アルプスに生息するほ乳類のアズミトガリネズミや鳥類のライチョウは、本州中部の亜高山帯～高山帯に分布が限定されています。鳥類は、一般に飛翔能力が高いため、日本固有種率は低く、南アルプスでもライチョウ、ヤマドリ、アオゲラ等の限られた種だけとなっています。なお、分布が限定される種は、地域個体群の絶滅がその種の絶滅につながるため、その生息地は保全上重要な場所となります。

南限の種



ライチョウ ■●●●●◆



ホンドオコジョ ●●●●●◆

撮影／佐藤元一

南アルプスが分布の南限となっているほ乳類はホンドオコジョ、アズミトガリネズミ、鳥類はライチョウです。

動物の生息は、取り巻く植生や異種間の相互作用による影響を受けやすく、特に高標高域に遺存する個体群などは、地史の主要な段階を表す顕著な見本となっています。

南限の動物は、地球規模の環境変動による直接的・間接的な影響への感受性が高く、その存続が危ぶまれています。

生物多様性の維持（ニホンジカによる食害）



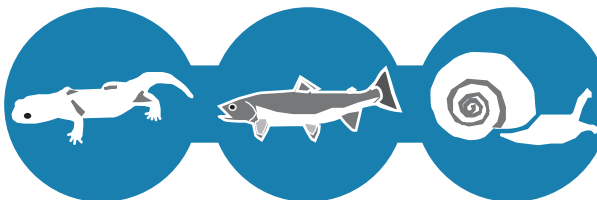
ニホンジカ ●●



荒廃したお花畑

南アルプスでは近年、積雪低下などに起因するニホンジカの生息範囲の拡大や個体数の増加で、その食害や踏圧を主因とする「お花畑」の荒廃が問題化しています。「お花畑」の荒廃は、そこに生育する植物の消失につながるだけでなく、それに依存する高山蝶など他の生物にも影響が及ぶと危惧されています。

したがって、生物保全上の観点から現況調査と保全対策の実施が急務であり、現在、「お花畑」の植生復元を目的とした防鹿柵の設置等を実施しています。



は虫類、両生類、魚類、貝類

は虫類は4科9種、両生類は4科9種、魚類は3科7種、貝類は16科45種の主に落葉樹林帯～亜高山帯に生息する種が確認されています。

絶滅のおそれのある種（IUCN・環境省・県のレッドデータブック等掲載種）



ヒメビロウドマイマイ ○★



アマゴ ●○○★

絶滅のおそれのある種として、は虫類4種、両生類9種、魚類3種、貝類18種が確認されています。これらの種は、生息環境の悪化や移入種との競合等による個体数の減少がそのまま継続すると、絶滅の可能性が高いと予測されています。

南アルプスで見られる種のうち、IUCN（レッドリスト）では両生類のほとんどが「低懸念」、魚類のアマゴが「絶滅危惧種」として掲載されています。また、環境省（レッドリスト）では両生類のアカイシサンショウウオ、貝類のツバクロイワギセル、ヒメビロウドマイマイが「絶滅危惧種」として掲載されています。

分布が日本に限られている種（分布域の広い種）



シムグリ（幼蛇） ★



タゴガエル ●★

日本に生息するは虫類、両生類、淡水魚類、陸・淡水産貝類の多くが日本固有種であり、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた動物が、日本列島として分離された中で、種レベルまで分化していった過程を表しています。

南アルプスに生息するは虫類のニホンカナヘビ、シムグリ、ニホンマムシ等や両生類のタゴガエル、カジカガエル等、淡水魚類のカジカは日本に広く分布しています。

生息地に定着する種



アカイシサンショウウオ ■●○○★



カドコオオベソマイマイ ○★

日本に生息する両生類、陸産貝類のうち、移動・分布拡大能力の低いもの、特定の環境に生息するものなどは定着性が高いといえます。

南アルプスに生息する陸産貝類のツバクロイワギセル、カドコオオベソマイマイ等は、本州中部の山岳地帯に分布が限定されています。一方、サンショウウオ類の中でもアカイシサンショウウオの分布域は狭く、静岡県、長野県の赤石山脈南部での確認にとどまっています。なお、分布が限定される種や定着性の高い種は、生息地の消失や地域個体群の絶滅がその種の絶滅につながるため、その生息地は保全上重要な場所となります。

在来の個体群の維持（移入種の問題）



ヤマトイワナ ●★



ニッコウイワナ（移入種）

南アルプスの溪流には、ヤマトイワナやアマゴが天然分布していますが、過去に漁獲対象魚種として放流された別亜種のニッコウイワナやヤマメが移入し、在来種の遺伝的攪乱が危惧されています。

なお、ヤマトイワナは、本州中部地方の太平洋側と紀伊半島の山岳地帯の河川に生息しますが、ニッコウイワナとの交雑が確認されています。



昆虫類

昆虫類は、落葉樹林帯～高山帯に生息する 179 科 2,871 種が確認されています。

絶滅のおそれのある種 (IUCN・環境省・県のレッドデータブック等掲載種)



ミヤマシロチョウ ■●○●★◆

撮影／高橋真弓



クモマベニヒカゲ ○●●★◆

絶滅のおそれのある種として、昆虫類 133 種が確認されています。これらの種は、生息環境の悪化による個体数の減少がそのまま継続すると、絶滅の可能性が高いと予測されています。

南アルプスには、クモツマキチョウ、ミヤマシロチョウ、タカネキマダラセセリ、クモマベニヒカゲ等の高山蝶 7 種が生息していますが、環境省（レッドリスト）では「絶滅危惧種」等として掲載され、南アルプスが分布の南限となっています。

分布が限られている種 (日本固有種、南アルプス限定種、本州中部限定種等)



ルリボシカミキリ ★



ヒロガワラツヤムネハネカクシ ★

南アルプスに生息する昆虫類には、日本固有種や分布の限られた種（亜種含む）が多く、大陸と陸続きであった時代に渡ってきた昆虫類が、日本列島として分離された中で、種レベルまで分化していった過程を表しています。

特に、オサムシ類やハネカクシ類など地表性甲虫類の多くは、進化の過程で飛翔能力を失ったため、地理的隔離による種分化が進んだと考えられます。また、寒冷な地域に生息するチョウ類やカミキリムシ類は、日本では亜高山帯～高山帯の狭い範囲に氷河遺存的に分布しています。

生息地に定着する種



ミネトワダカワゲラ ●★



ガロアムシ ★

撮影／石井克彦

昆虫類の中には、ごく狭い範囲で一生涯を終えるものもいて、寒冷地の遺存種、翅をもたない種、特定の生物への依存種などは定着性が高いといえます。

南アルプスには、幼虫期は冷水中で過ごし変態後も翅をもたないミネトワダカワゲラ、後翅を失い地表性となったタニグチコブヤハズカミキリ、土壌や洞窟等で地下生活のガロアムシ、ヒメオオズナガゴミムシ、タカネメクラチビゴミムシ等が生息しています。なお、定着性を高くすることで生き残ってきた昆虫類は、地域個体群の絶滅がその種の絶滅につながる可能性が高いので、その生息地は保全上重要な場所となります。

特定の植物を餌とする種



クモツマキチョウ ■●○●★◆

撮影／高橋真弓



クジャクチョウ ★

昆虫類の中には、特定の植物に頼って生活しているものが多いです。クモツマキチョウはヤマハタザオやミヤマタネツクバナ等のアブラナ科植物、クジャクチョウはミヤマライカサやアカソ等のイラクサ科植物のように、多くのチョウ類は幼虫の食草が決まっています。食草のある場所でなければ繁殖ができません。一方、甲虫のソウムシ類は、1 つの植物でも葉や髄、種子、果実、花、朽木等の部位のいずれかを専門に食べるように高度に種分化しています。

南アルプスの植生の豊かさは、チョウ類やガ類、ハムシ類、ソウムシ類などの植食性昆虫に生息場所を与え、多様な種の生息を支えています。

南アルプス世界自然遺産登録推進協議会

平成一九年二月、南アルプスに関係する静岡・山梨・長野三県の関係十市町村は、南アルプス世界自然遺産登録を目指し、「南アルプス世界自然遺産登録推進協議会」を設立しました。推進協議会では、「学術的知見の集積」、「保護担保措置の拡充」、「国民的な合意の形成」を取組方針として掲げ、様々な活動を実施しています。

設立

名称

南アルプス世界自然遺産登録推進協議会

設立日

平成十九年二月二十八日

構成団体

静岡市、川根本町（静岡県）
 韮崎市、南アルプス市、北杜市、早川町（山梨県）
 飯田市、伊那市、富士見町、大鹿村（長野県）
 （オブザーバー） 静岡県、山梨県、長野県（平成二十一年度から）



設立の経緯

- ・平成十八年 二月 南アルプス市において、静岡市議会・南アルプス市議会・南アルプス市議会の合同研究会を開催
- ・平成十八年 十月 韮崎市、南アルプス市、北杜市、早川町が「南アルプス世界自然遺産登録・山梨県連絡協議会」を設置
- ・平成十九年 一月 飯田市、伊那市、富士見町、大鹿村が「南アルプス世界自然遺産登録・長野県連絡協議会」を設置
- ・平成十九年 二月 静岡市、川根本町が「南アルプス世界自然遺産登録・静岡県連絡協議会」を設置
- ・平成十九年 二月 関係十市町村により、「南アルプス世界自然遺産登録推進協議会」を設立

活動内容

1. 学術的知見の集積

南アルプスの「地球規模での顕著で普遍的な価値」を明らかにするため、南アルプスの特殊性や独自性、普遍性についての学術的な知見を集積します。

○総合学術検討委員会・各県学術検討委員会



各県の構成市町村は、南アルプスの世界自然遺産登録に向けた学術的知見の集積を図るため、平成 19 年度にそれぞれ学術検討委員会を設置し、調査・検討を進めるとともに、合同の意見交換会等も開催し、情報共有に努めています。

○南アルプス学術フォーラム



南アルプスの学術的知見を集積し、多くの方々に知ってもらうため、平成 20 年 12 月 20 日、南アルプス市において「南アルプス学術フォーラム」を開催しました。約 300 名が観覧する中、基調講演やパネルセッション等が行われ、3 県の学術検討委員会から学術調査推進提言がなされました。

○ジオパークへの取り組み



南アルプスの地形・地質に関する学術的知見の集積を図るため、推進協議会にジオパーク推進部会を設置し、ジオパークへの登録に向けた取り組みを実施しています。その成果が実り、平成 20 年 12 月、南アルプスの中央構造線エリアが日本ジオパークに認定されました。

2. 保護担保措置の拡充

南アルプスの傑出した自然環境を将来に継承するため、地域をあげて南アルプスの保護管理体制の構築と適正利用方策の検討を行います。

○関係機関への要望活動



平成 19 年度と平成 20 年度の 2 回にわたり、環境省と林野庁に対し、①南アルプス地域における高山植物等被害対策の実施について、②南アルプス国立公園の公園区域及び公園計画の見直しについて、③南アルプス国立公園を専管する自然保護官事務所の設置及び専任の自然保護官の配置について、④エコツーリズム推進法に基づく国の支援策の拡充について、の 4 項目について要望活動を行いました。その成果が実り、平成 20 年 10 月、南アルプス地域に専任の自然保護官が配置されました。

○幹事会・各県連絡協議会代表者会議



南アルプスの世界自然遺産登録に向けた検討を行うため、随時、構成市町村の担当課長級から構成される幹事会を開催するとともに、各県連絡協議会の代表者会議も開催し、3 県相互の連携・協力体制を構築しています。

○植生復元活動等への参加



南アルプス地域におけるニホンジカの食害が顕著であることを踏まえ、現在、自然環境団体等が主体となって各地で実施されている防鹿柵の設置や美化清掃等の植生復元活動に積極的に参加しています。

—防鹿柵の中で確認された植物—



ニッコウキスゲ（聖平）



トモエシオガマ（三伏峠）

3. 国民的な合意の形成

南アルプスを日本の宝、世界の宝として多くの国民の皆さんに認識してもらうため、南アルプスの素晴らしさや魅力を積極的に発信します。

○南アルプスサミット



南アルプスの素晴らしさを多くの国民に伝えるため、平成 19 年 7 月 28 日、静岡市において「南アルプスサミット」を開催しました。約 900 名が観覧する中、基調講演や事例発表等が行われ、南アルプス世界自然遺産登録推進アピールが採択されました。

○国立公園フェアへの出展



平成 19 年度と平成 20 年度に国立公園法 50 周年記念事業の一環として、環境省主催で開催された「国立公園フェア」にブースを出展し、推進協議会の活動の周知を図るとともに、南アルプスの魅力を広く国民にアピールしました。

○南アルプス賛助会員



南アルプスの世界自然遺産登録に向けた取り組みの輪を拡大するため、南アルプスの世界自然遺産登録の推進に賛同する団体や個人を賛助会員として募集し、平成 21 年 3 月末現在、南アルプス賛助会員は 317 団体・人（65 団体、252 人）となっています。

詳細については、ホームページ (<http://www.minamialps-wh.jp/>) をご覧ください。